

# 理想の学生と教師

上田 修一（立教大学特任教授）

## はじめに

大学で教える立場に経って長いですが、今の学生に比べて昔の学生はよかった、教え甲斐があったと思ったことは一度も無い。ただ、印象に残る学年とそうでない学年とがあることは、多くの教師が実感していることだろう。小学校から高校まで、生徒が卒業するときには、入学時より必ず成長している。学校という場合は、平凡で退屈かも知れないが、種々のやりかたで一人一人を育てている。大学もまた同様である。入学成績のよい学生が、卒業時に多くの A や優を得ていることはもちろんよくあることだが、低学年の時には目立たなかった学生が、成績で、あるいは成績とは別のところで立派な業績をあげて卒業することのほうが多い。大学の教育は、在学生全体の知的レベルや問題解決能力を上げていることは確かであるし、一部ではあるかもしれないが、学生の潜在能力を引き出すことも往々にしてある。

大学の授業を担当する者は、20 歳代後半の非常勤講師から定年間近の老齢の教授まで様々であるものの、学生は、履修科目の教員がどのような立場であるか、まして教員が学生をどのように考えているかについておおむね無関心と言えよう。ほとんどの教員にとって、教授、准教授、助教の別、専任と非常勤の違い、講座やゼミを持っているかどうかなどの大学内の階層秩序は重要だが、学生には、その違いはわかりにくく、知らないままに卒業する者も多い。それぞれの科目を担当する教員の性別や年齢、それに国籍といった見かけによる要素を学生は多少は気にするだろうがそれだけである。文科系であれば、普通は「ゼミ」の担当教員だけが、個々の学生とやや強い接触を持つ仕組みになっている。

大学だけでなく学校一般では、専任の教員は、毎年、新しい学生や生徒を担当する。学

生や生徒たちは、数年間だけ、教員と関わりを持って卒業し、例外はあるものの、その後のつながりは乏しい。

そうした中で、大学における理想の学生と教員を考えるのは難しいことかもしれない。教員と学生たちの間には、いろいろな状況がありうる。極端な場合には、パワーハラスメントに近かったり、学生が反抗的になったりする状況までありうる。しかし、普通は、穏やかに淡々と過ぎていくだけである。

## 理想の学生

教師としてありがたいのは、教えたことを間違いなく理解してくれる学生であることは共通しているだろう。つまりハリー・ポッターシリーズのハーマイオニー・グレンジャーことエマ・ワトソンである。彼女は、ホグワーツ魔法魔術学校では、常に学年で 1 位の成績、読んだことのある本の内容を完全に記憶していて、授業で一度習ったことのあることは正確に再現できる。教師にとっては、選ばれし者ハリー・ポッターや育ちのよいロン・ウィーズリーよりも、教師の言うことを理解でき、素直に教えに従う真面目な努力家のほうがありがたいのである。

孔子の弟子の顔回について、同門の子貢は、「顔回は一を聞いて十を知る事が出来ますが、私は一を聞いて二を知るくらいです」（論語公冶長第五）と述べた。「一を聞いて十を知る」などは想像外であるが、「一を聞いて二を知る」学生も教師にとっては、脅威であろう。「一を聞いて一を知る」だけで十分である。

もう一つ、大多数の学生は気づかないことであるが、教師にとっては、講義で話すことにうなずいてくれる学生もありがたい存在である。こうした学生は、往々にして、期末テストの成績がよいとは限らないのが残念では

あるが、単調な教室でコミュニケーションが成り立っていることを教師は実感でき、また、自信を持つことが出来る。

### 『モナリザ・スマイル』の優秀な学生たち

教師と学生の間が濃くなり、学生の生き方にまで関わる場合がある。

米国で 1953 年秋のことである。ジュリア・ロバーツ演じる美術史の講師は、ニューイングランドにある米国で最も保守的と言われていた女子大ウェルズリーにロサンジェルズからやってきた。最初の授業の時、ジュリア・ロバーツは、入門編のスライドを用意していく。教室に入っていくと一人の生徒が駆け寄り、スライドを受け取り、直ぐにスライド映写機にセットする。1 枚目のスライドが映されると、間髪入れず一人の学生の手が上がり、『『傷ついた野獣』アルタミラ 紀元前 1 万 5 千年』と言う。説明を始めると、その優等生ジュリア・スタイルズは、「背中の線の躍動感あふれる力強さと陰影の付け方に特徴があります」と続ける。それではと次のスライドを映すと、キルステン・ダンスト演じる別の学生が「1879 年にフランスのラスコーで発見、年代は紀元前 1 万年」と答える。スライドを映すたびにこれが繰り返される。ジュリア・ロバーツが、「前にも美術史の授業を受けたんですか」と尋ねると、みな首を振る。「では、答えて下さい。すでに教科書を全部読んだ人」ときくと、全員が勢いよく手を上げ、一人は「参考文献も全部読みました」という。

大学教師なら誰でも、この新任講師同様、最初は当惑し、そして感動するはずである。こんな優秀な学生たちを教えることになるのだ。無気力で、仕方なく授業を受けている連中ではなく、知的好奇心があり、熱心で、授業への準備を怠らない積極的な学生たちに教えるという状況なのである。

これは、マイク・ニューウェル監督の『モナリザ・スマイル』(Mona Lisa Smile、2003 年)の冒頭の場面である。ウェルズリー

大学は実在し、19 世紀に創立され、米国東部の名門女子大学の中の一校である。ウェルズリー大学の卒業生にヒラリー・クリントンがいて、その自伝の影響を受けてこの映画が作られたらしい。

1953 年の同大学では、良妻賢母を育てる教育が行われていた。アイロンをかけたりする家事の授業もあった。カリフォルニアから東部へ赴任したジュリア・ロバーツは、良い相手との結婚しか頭にない優秀な学生キルステン・ダンストらの意識を変えようとし、ロースクールを目指す学生ジュリア・スタイルズを応援する。

結末でジュリア・ロバーツは、大学側から学生たちを扇動したとみなされ、わずか 1 年で大学を去らざるを得なくなる。しかし、彼女を乗せたタクシーが校門を出るとき、学生たち、特にジュリア・ロバーツを激しく嫌っていたキルステン・ダンストがいつまでも追いかけてくる。

### 『ミス・ブロディの青春』の困った教師

『モナリザ・スマイル』よりもずっと前の『ミス・ブロディの青春』(The Prime of Miss Jean Brodie、ロナルド・ニーム監督、1968)は、1930 年代のエジンバラの保守的な女子校が舞台となっていて、教師のマギー・スミスは、自信満々で新学期を迎える。原作は、ミュリエル・スパークの舞台劇である。マギー・スミスは、英国の代表的な舞台、映画俳優で、ハリー・ポッターシリーズのマクゴナガル先生、テレビドラマ『ダウントン・アビー』の痛烈な皮肉で座を静まらせる伯爵未亡人バイオレットを演じていた。老貴族ばかりでなく、『ミス・シェパードをお手本』(ニコラス・ハイトナー監督、2016)ではホームレスになってみせた。

そのマギー・スミスが 30 歳代半ばで演じる教師ブロディは、生徒たちに「私の仕事は、若い体に老人の知恵をつけること。私の生徒はみな私の宝です。この手に引き受けた少女は、生涯、私の娘。教師は私の天職、誰に求

婚されてもお断り。私の青春は、教育に捧げます」と宣言する。1930年代の英国で、プロディは、イタリアのムッソリーニやスペインのフランコに傾倒していることを広言し、生徒には大義に殉ずる美しさを説く。やがて、校長から解雇を伝えられたプロディは「生徒は皆私の側につくでしょう」と言うが、『逢びき』のヒロインだったセリア・ジョンソン演じる校長は、「そうかしら」と冷たく答える。辞めるときに、生徒が追ってくることはない。

生徒の個性を伸ばすことをモットーとして、一人一人と濃密な関係を結び、自分には教育への熱意と天性があると思込んでいるが、次第に思想的に偏っていき、周囲から孤立しているのに気づかず、現実を直視できなくなっている善意の教師を冷笑している。

### 『まあだだよ』の不可解な師弟愛

黒澤明の最後の監督作品『まあだだよ』（1993年）は、内田百間の随筆『摩阿陀會』（津軽書房、1975）を元にしていて、内田百間は大正9（1920）年に31歳で法政大学の独逸語部の教授となったが、昭和24（1949）年にその時の教え子を中心に還暦を祝う会が開かれた。以後、毎年、「摩阿陀會」という内田百間と教え子たちとの会が開かれ、第21回まで続いた。

8年前に黒澤明の全監督作品を『姿三四郎』（1943年）から順番に観た。黒澤作品の大部分は、レンタルDVDとなっているので、全部を観るのにそれほど手間はかからないが、当時は『デルスウザーラ』（1975年）だけは、レーザーディスク版しかなく、プレイヤーのあるところを見つけるのが大変だった。確かに黒澤明は、監督そして脚本家として天才と言ってよい人物であるが、退屈さを嫌うわがままな観客として黒澤作品を観るなら、『生きる』（1952年）や『七人の侍』（1954年）、『天国と地獄』（1959年）をピークとして、監督の年齢が上がるにつれて、映画としての緊張感が徐々に下がっていくように思う。

『まあだだよ』では、法政大学時代の学生が、卒業後も内田家に押しかけて、しきりと「先生」の世話を焼く。百間の飼猫を探す手伝いから、家を建てる土地の紹介までして、まるで実の子供のようである。内田百間の『阿房列車』には、なんとも言えない味とおかしみがあるのは確かであるし、大柄でいつも威張っていた百間は、東京駅の一日駅長は喜んで引き受けるものの、学士院会員推挙には「いやなものはいやだ」と言って断る変人だった。実際の百間と『まあだだよ』の先生とは、周りに世話をしてくれる人物が必要という類似点がある。しかし、『まあだだよ』では、周囲はみな先生の冗談を面白いがるが、ユーモア感覚をとやかくは言いにくい、「サラリーマン川柳」で爆笑するたぐいのものであるに過ぎない。

黒澤明の遺作となったこの作品が描こうとした美しい師弟愛を大事に思う人たちもいることはいたが、興行としては失敗して大きな赤字を出し、企画製作した大映の幹部は職を失った。冒頭で、百間は、授業が終わった後に、学生たちに文筆業でやっていけそうだから大学を辞めると言うのだが、それに対して、一人の学生は「先生はドイツ語の他になんだかとても大切なことを教えてくれたような気がします」と述べる。残念なことに「なんだかとても大切なこと」が何かわからないまま終わる。教え子の中心は、井川比佐志と所ジョージで、師への敬愛は盲目的、図式的であり、第三者からみれば鼻白む思いがする。教え子たちがなぜ百間先生のためにいつまでも集まるのかは、本来、説明する必要がないことであろうが、この作品では、それを確かめたくなくなってしまうのである。

『七人の侍』で黒澤明の助監督を務めた堀川弘通は、『まあだだよ』についてこう言っている<sup>1)</sup>。

『まあだだよ』は内田百間と弟子たちの関係を借りて、クロさん自身とその仲間たちの師弟愛を描いたものと、一般に受

け取られているが、これは正解だと思う。そしてもう一步突っ込んで言えば、現実にはない理想の師弟愛、すなわちクロさんの夢に描く師弟関係を理想的に描いたものということができる。

そして、『『まあだだよ』はクロさんらしい思い込みの強い映画だった。(中略)百間先生を称える摩阿陀会のパーティの大騒ぎは、どうしてあんなに、『百間先生が偉い』と騒ぐのか納得が行かず、感情移入ができなくて観客を白けさせてしまうだけだった」と厳しい。

この映画について、黒澤明は、インタビューでこう語っている<sup>2)</sup>。

ぼくたちは子供の頃から、そのあと中学生になって以後もそうですが、好きな先生の家によく遊びに行っていましたよ。そういう先生の人柄から学んだことがとても大きかったと思ってる。先生の奥さんは、おやつも出してくれたし、ときどきご飯も一緒に食べさせてくれた。いま考えると、先生は薄給だったろうし、迷惑をかけたと思いますよ。だけどそういう先生がいてくれたことを、いまも忘れていない。先生が生徒と打ちとけ合っただけで教える、それが大切なことなんだよね。生徒は先生を尊敬しながらも、親しみを感じている。いまはそういう関係が失われているから、映画を見た人は、ああいう師弟関係がうらやましいと言いますね。

宮本輝の書き出しが有名な書簡体小説『錦繡』(1982年)に、主人公の勝沼亜紀の夫が大学の講師から助教授になると、担当するゼミを受講している学生が頻りに家に来るようになる様子が書かれている。「勝手知ったる他人の家とばかりに、冷蔵庫からビールやジュースやチーズなどを取り出し、勝沼を囲んでわいわいやっておりました」。これは、

1980年代の小説であるが、家に来た学生たちが冷蔵庫を勝手に開けて飲み物を取り出したり、食器棚から食器を出したりするのを許している気の弱い大学教師は今でもいることだろう。

実際には僅かな期間しか接触してはいないのに、教え子がいつまでもいつまでも教師を慕い続けるようになったり、自宅にまで彼らを迎え入れ、擬似的な親子関係を作ったりすることを大切にする黒澤明的師弟愛は理想として受け容れられやすいであろう。こうした教師と学生の関係は、感傷的で、惰性的であるが故に長続きする。

### 『Re:LIFE～リライフ』の教師失格者の転回

『Re:LIFE～リライフ』(The rewrite、マーク・ローレンス監督、2014)の主演、だめな男ヒュー・グラントは、ハリウッドの脚本家であるが、大ヒット作の後にはぱっとせず、東部の小さな公立大学のシナリオ講座で教える仕事しかなくなってしまう。赴いた大学の学科主任教授に集めた事前レポートを渡され、全部読んで担当科目の受講生を選ぶように言われるが、真面目に教える気が全くないヒュー・グラントは、レポートは一つも読まず、写真も付いた学生データベースから容姿や名前などから受講生を選ぶ。さらに、最初の授業では、シナリオを書けと言うだけで、直ぐに休講にしてしまった。ようやく、授業をすることになるが、出席をとった後、準備もしていないので、何をしたらよいかわからない。しかし、それを察した親切な学生が適切な質問をしてくれたので、ようやく切り抜ける。そのうちに、授業で何をすればよいかわかるようになっていくとともに、受講生の脚本を添削して良いものにしていくようになるし、脚本家の卵も育てる。結局、紆余曲折はあるものの、教師嫌いであつたはずなのに大学教師の仕事の続けたいと思うようになる。

## 逆説的な教師像

内田樹は、『二十四の瞳』（木下恵介監督、1954）の女性教師高峰秀子は、「教師としてほとんど無能で」と指摘したあと、次のように述べる<sup>3)</sup>。

私が子どもだった頃も、教師たちの出来にはかなりむらがあった。「こんな人が教壇に立ってよろしいのか？」と思われるような不埒な人物も少なくなかった。けれども、それによって生徒たちの学力や情操の発達が著しく阻害されたということはなかったように思う。子どもたちは「変な先生」からも学ぶべきことは学んだのである。それはどのような先生であれ、先生である限りその一挙手一投足のうちにながしかの教育的情報が含まれているに違いないと私たちが信じていたからである。そのような信頼が定着している限り、誰が教師であれ、学びは起動するのである。

そして、内田は、ジャック・ラカン『教えるものへの問い』にある「私は教卓のこちら側に立っていますが、この場所に連れてこられると、すくなくとも見掛け上は、誰でも一応それなりの役割は果たせます。才能あふれるアメリカの詩人がいみじくも指摘したように、無知ゆえに不適格である教授はいたためしがありません。人は知っている者の立場に立たされている間はずねに十分知っているのです」<sup>4)</sup>を引用して「これは教育について私がこれまで読んだ言葉の中でもっとも正しい言葉である」と述べている。

大学時代に、ドイツ語を習った先生は、いつも学生に知的な刺激を与えようとする立派な方だったが早世された。その後、同僚となったとき、授業における声の出し方といったことまでの教え方全般について語ってくれた。自分が教員になってから、教え方について考えることはほとんどなかったが、時折、この

先生の教え方に対する真面目な態度を思い出して考えることがあった。

大学における教え方については、教員それぞれが考えればよいことである。授業は改善すべきとし、米国流の学生の授業評価やアクティブラーニング等の導入を試みるのもよいけれど、これらに不自然さがつきまとうことは否めない。

大学には理想の学生、理想の教師というものはない。教師は、教壇の前に立ち、そこで教師らしく振る舞い、学生は、学ぶという姿勢を持っているだけで十分ではないか。

---

1) 堀川弘通. 評伝黒沢明. 毎日新聞社, 2000. 339p.

2) 黒澤明. 大系黒澤明 第3巻. 講談社, 2010. 750p.

3) 内田樹. 昭和のエートス. 文藝春秋, 2012. 325p.

4) ジャック・ラカン. 小出浩之ほか訳. フロイト理論と精神分析技法における自我 下. 岩波書店, 1998. 266p.